様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３３３０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５８２０３１５

研究課題名（和文）フランス近代建築における建築史の成立と建築教育の形成

研究課題名（英文）Formation of architectural history and education in French Modern Architecture

研究代表者
戸田　穣（TODA, JO）

金沢工業大学・環境・建築学部・講師

研究者番号：００５８８３４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では建築家ジャック＝ギヨーム・ルグランの建築全史の構想について考察した。その主たる成果は次３つである。(1) ルグランの建築史構想の全体の見取図を復原的に考察した、(2) 1800年前後における建築史の成立が、新しい政治体制にふさわしい新しいフランス建築様式の創造であったことを指摘した、(3) 建築史構想を同時代の建築知の構図のなかに位置づけ、建築教育とのかかわりを指摘した。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on the concept of the General History of architecture by the French architect Jacques-Guillaume Legrand. Its main results are as follows. (1) We review the overall composition of Legrand's project for Architectural History; (2) We point out that the establishment of architectural history around 1800 aimes at the creation of a new French architectural style suitable for a new political system after the French Revolution; (3) We position the project to describe the General History of Architecture in the development of contemporary architectural knowledge and in the relationship with architectural education in this period.

研究分野：西洋建築史

キーワード：フランス建築史　建築史　建築教育

１．研究開始当初の背景

(1) フランスの 18 世紀後半の啓蒙主義時代の建築、それに続くいわゆる「新古典主義建築」については、これまでにも多くの研究がなされてきた。アンシャン＝レジーム末期からフランス革命期の建築史研究においては、ヴェルネ・ザンビアン（Werner Szambien）氏の研究が重要である。『ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン　1760-1834　模倣から規範へ』（1984）、『シンメトリー・趣味・カラクテール　古典主義時代（1550-1800）の建築の理論とターミノロジー』（1986）、『革命暦 2 年のプロジェクト：革命期の建築コンクール』（1986）、『建築博物館』（1988）の 4 書である。これらのなかでザンビアンは、アンシャン＝レジーム末期から革命期におこった建築知の東地中海世界への地理的・歴史的拡大を指摘し、建築模型や古代建築実測図といった「建築コレクション」の形成を指摘している。デュランの『新旧建築比較図集』も、そうした建築知の再編集の行為と位置づけられる。本研究においても、ザンビアンの指摘した前提を共有している。

(2) もうひとつ本研究の背景となる研究動向として、従来の新古典主義・折衷主義という様式概念の相対化がある。従来の新古典主義はポンペイやパエストゥムなど南イタリアにおける考古学的な発見によって、それまでの古典主義（古代建築のモチーフ）がさらなる厳格さを求められ、やがて様式的な展開に行き詰まるようになり、その組み合わせ（折衷）に陥ったのだとする見方があった。その背後にはデュランの建築類型による機能主義的な建築観の台頭とガラスと鉄構造の技術的な発展という近代主義的な進歩史観があった。つまり技術の進歩とともに胚胎された近代主義と形骸化する歴史主義という対比である。こうした見方に対して 18 世紀後半から 19 世紀に至る時代の固有性のなかで、その建築様式を理解しようという動きが近年顕著である。とくに新古典主義から折衷主義という従来の流れを、新しい様式の創造の過程と捉えるのが現在のフランス建築史研究の動向のひとつである。

(3) またザンビアンが先鞭をつけた建築理論、建築コレクションへの関心を引き継いだのがジャン＝フィリップ・ガリックの『イタリア集成――フランスの建築書におけるイタリア・モデル』（2004）である。ガリックが注目したのは「建築書」という古いメディアであるが、その範囲をルネサンス時代アルベルティにはじまる「論」（traite）の時代から、1800 年前後のペルシエとフォンテーヌに代表される「図集」（recueil）の時代を経て、最後に 1840 年頃からはじまる「雑誌」（revue）の時代まで延長している。ガリックは 1800 年までのフランス建築を、建築論の影響（なかんずくそれはイタリアの影響であった）から脱出するまでのプロセスだと論じている。

1980 年代のザンビアンの研究にはじまり、2000 年代のガリックの研究までの 2 点をアウトラインに本研究の背景を示した。

＜参考文献＞

・Werner Szambien
- *Jean-Nicolas-Louis Durand 1760-1834. De l'imitation à la norme*, 1984
- *Symétrie, Goût, Caractère. Théorie et terminologie de l'architecture à l'âge classique 1550-1800*, 1986
- *Les projets de l'an II：concours d'architecture de la période révolutionnaire*, 1986
- *Le Musée d'architecture*, Paris, 1988.
・Jean-Philippe Garric
- *Recueil d'Italie. Les modèles italiens dans les livres d'architecture française*, 2004

２．研究の目的

(1) 前項において示した背景において、本研究では「近代フランスにおける建築史の成立と建築教育の研究」と題して、建築家・建築史家ジャック＝ギヨーム・ルグラン（Jacques-Guillaume Legrand, 1753-1807）を中心に、18 世紀末から 19 世紀初頭のフランス建築における建築史の成立と建築教育の形成について研究する。

（2） 建築家ルグランは、18 世紀後半からフランス革命期に活躍した時代を代表する建築家であるとともに、著述においても活躍した建築史家でもあった。彼は生前『建築全史』全 30 巻を予告しながら、早逝により果たせなかった。けれども『建築全史序説』など「全史」の断片といえる複数のテキストから、ルグランの考えた建築全史を復原的に考察することは可能である。

（3）またルグランは建築全史と並行して、フランス建築史についても大きな関心をもった。彼は同時代の建築作品にたいする批評も著したことから、啓蒙主義時代・革命期の建築史研究においてはしばしばテキストが引用されてきたが、ルグランというひとつの主体のもとに理解されることはなかった。本研究では断片的に論じられてきた彼のテキストを、ルグランという人物の建築観のもとに統合的に論じることを目的とする。

その際に、重要なのが建築史と建築教育の関係である。ルグランの建築史への関心は、建築教育への関心と結びついていた。そのことを明らかにするのも本研究の目的のひとつである。

３．研究の方法

史資料の分析を中心とする。主たる対象資料はルグランの刊行資料・草稿資料である。ルグランは『建築全史序説』（1800-1801/1808,a）を中心に、『様々な民

族の建築の傑作コレクション』(1806, b)、『古代のギャラリーあるいは建築の傑作コレクション』(1808, c) 等の建築コレクションの解説書のなかでも、断片的に「建築全史」の構想を明らかにしている。

またルグランによって「建築全史」と平行して進められたのが「フランス建築史」の記述である。ルグランはまず『芸術ジャーナル』(d)、『美術館年報』(e)という二つの芸術雑誌に寄稿し、そこから『パリの記述』(1806/1809, f) という書物を出版している。

またフランスにおけるピラネージ全集刊行のために書かれた「ピラネージ伝」(1799, g)、フランス国立美術学校図書館に保存されているルグランの草稿資料「授業計画あるいは完全な建築講義」(1796、h) は、1800 年前後のフランスにおける建築知の状況と建築史・建築教育の関係を示唆する重要な資料である。

<u>主たる対象資料</u>

J.-G. Legrand
- Plan d'enseignement ou cours complet d'architecture, propose par J.-G. Legrand, [1796?], (h)
- Notice historique de la vie et de les ouvrages de J.-B. Piranesi…, [1799], (g)
- Essais sur l'histoire generale de l'architecture, 1800-1801/1808, (a)
- Collection des chef-d'oeuvre de l'architecture des differents people, 1806, (b)
- Galerie antique, ou collection des chef-d'oeuvre d'architecture, 1808, (c)
- Journal des arts (d)
- Annales du muse (e)
- Description de Paris et ses edifices, 1806/1809, (f)

４．研究成果

(1) 「ルグランの建築史構想について」

ルグランの建築史構想の見取図を次頁の図 1 に示す。

① フランス建築史の試み：建築家としてのキャリアの途中から 1800 年を境にルグランは旺盛な執筆活動を開始する。まずフランス建築史についてルグランは、はじめ『芸術ジャーナル』誌に、ついで 1801-1807 年のあいだ『美術館年報』誌に、フランスの近世建築とくに 18 世紀後半から 1800 年代までの建築についての多くの記事を寄稿している。

一方、1806 年に第 1 巻（第 1 部・第 2 部）が、1809 年に第 2 巻（第 3 部・第 4 部）がまとめられた『パリの記述』は、ルグランの真筆と断定できるのは第 1 部「教会建築」の部のみであり、第 2 部「公的建築」はカトルメール・ド・カンシーに、第 3 部「公用建築」は建築家ニコラ・グレに引き継がれている。第 4 部「住宅」は不明であるが、ルグランのテクストの採録も多く、『パリの記述』が当初はルグランの『美術館年報』連載記事をもとに編む計画であったことは間違いない（いずれの出版人もシャルル・ポール・ランドンである)。

『パリの記述』第 1 部においてルグランは教会建築に限定されるがフランス建築の通史を中世のノートル・ダム大聖堂から説き起こしている。そのなかでルグランは、フランス建築史に次の 4 つの時代区分を設けている：(a)「いにしえのゴシック」、(b)「ゴシックから諸芸術のルネサンスへの移行期」、(c)「一般に『フランス建築』と呼ばれるところのルイ 14 世時代の近代様式」、(d)「現下、新様式としておこりつつある国家的建築」

またルグランの同時代 (d の時期にあたる) には二つの傾向が認められると指摘している。ひとつは「古代ローマ人の趣味」であり、もうひとつは「古代ギリシア様式」としてのドリス式オーダーである。前者についてはルイ 15 世・16 世時代の《サント・ジュヌヴィエーヴ教会》や《サン・フィリップ・デュ・ルル教会》などが代表例として挙げられている。後者については《オスピス・ド・ラ・シャリテ》や《オテル・デュ》の正面門などの小品しかいまだ実現されておらず「現今の世紀を描きだすべき偉大な建物が建設されるにはまだ待たなくてはならない」としている。

ルグランがみずかの建築史を記述するにあたって仮想敵としたのは、ジャック＝フランソワ・ブロンデルが『フランス建築』（1752-56）ならびに『公共建築講義』（1771-1777）で称揚した「フランス建築」がある。上述『パリの記述』においては(c)の時期にあたる。ブロンデルが扱った範囲も 17 世紀のルイ 14 世時代から 18 世紀初頭までの「フランス建築」を中心であった。そしてルグランがアンシャン＝レジーム末期の啓蒙主義時代から革命期を経て第一帝政に至る時代へとフランス建築史を進めたといえる。ルグランは『美術館年報』の連載記事のなかで、18 世紀の後半に起こったフランス建築の様式的な展開をゴンドゥアン《パリ医学校》とシャルグラン《サン・フィリップ・デュ・ルル教会》を転換点として記述してみせたが［戸田（2011)］、これらはブロンデルの著作には収められていない。

フランス建築史叙述におけるブロンデルからルグランへの展開は、20 世紀のエミール・カウフマンの歴史叙述も大きく規定するものでもあった。

② 建築全史の試み：一方『建築全史序説』は、デュランの『新旧建築比較図集』の中に序論として、解説「建築についての理論的省察」とともに併録された。この事実はこれまであまり強調されてこなかった。デュランの「図集」は 20 世紀まで版を重ねたが、ルグランの「歴史」は 19 世紀半ばで絶版となる。デュランは「図集」の企図を「これまで建築について出版された書物のほとんどに、取っ

て代わるため」と言明している。それは歴史性を排除して同一用途・同一スケールでの建築類型の比較という方法によって実行された。後年の 1833 年版ではよりはっきりと、比較と選択という設計方法論として「図集」を再定義している。たいしてルグランは自分の「歴史」は「あらゆる民族の下でのあらゆる建築の総覧」と謳っている。ガリック（2003）は、デュランによる図面表現とルグランによる建物記述の差異に注目している。つまりグリッド上の空間単位を主眼におくデュランの図面は単純化されているが、ルグランはデュランによって省略された細部に注目して歴史的・地理的な特質を明らかにしようとしているのだ。このことをわれわれの関心から要約すると、デュランの方法が単純化と省略だとすれば、ルグランの方法は差異化と美的判断の洗練だということができる。デュランが細部の単純化と美的価値判断の放棄によって徹底して非歴史的であることで相対主義へと向かったのに対して、ルグランは差異化と精緻化によって相対主義へ向かったということがいえるだろう。

＜参考文献＞
戸田穣「ジャック＝ギヨーム・ルグランと建築の新しいシステム」（日本建築学会『学術講演梗概集 2011（建築歴史・意匠）』、 pp. 723-724）

(2) 「フランス建築」の次の時代のモニュメント建立のために：ルグランや同時代の建築家が直面していた、ブロンデル「フランス建築」の次の新しい建築様式の問題とはどのようなものであったろうか。

① 国民公会期のコンクール　世俗のモニュメントの模索：フランス革命によって教会権力が一旦停止した時期、従来教会建築が果たしていた祝祭・慰霊といった機能を代替する、新しい建築類型が模索された。それは世俗のモニュメントによる来るべき国民国家の表象という、それまでになかった課題であった。これに応えようとする最初の試みが革命歴 2 年（1794 年）のコンクールである。このコンクールでは 17 にわたるプログラムが公募にかけられた。必ずしも実際の建設を前提としたわけではない本コンクールの意義は新しい用途を担う公共建築に対して多様な建築類型を提示することになった。そのなかには凱旋門、パンテオンのための記念柱ヴィクトワール広場のためのモニュメント、十日祭神殿などの記念建築や、野外競技場、議会議事堂、裁判所、治安裁判所、監獄、劇場、公共浴場のような新しい機能主義的な建築に対する提案が含まれた。様式的には古典主義を基調としつつ、エジプトやギリシアの流行が顕著なプロジェクトがみられた。

② 統領政府期　共和政と軍政のはざま：ナポレオン・ボナパルトが第一統領に就任した翌年 1800 年に企画されたコンコルド広場に建設される「戦士たちの記憶に捧げる」国家記念柱のためのコンクールは、新しい世俗のモニュメントを考える上で重要なコンクールである。

本コンクールでの最大の課題は、革命によって生まれた共和政という新しい国家像と、台頭しつつあるナポレオンとその権力の源泉である軍隊とを、どのようにひとつのモニュメントに調和させるかというものであった。当選案は様々な批判をうけて、建設は中止に追い込まれるが、このコンクールの重要性は、ひとつの国家的なモニュメントの表象作用を巡って、実に多様な批評が『芸術ジャーナル』他の建築メディアに掲載されたところにある。ルグランは参加建築家としてではなく主催者側として数多くの世論をとりまとめる立場を担った。この時の経験を経てルグランは精力的に建築メディア上に執筆を展開していくことになる。

③　第一帝政期　皇帝のためのモニュメント：ナポレオンは上記 1800 年のコンクールのあとにも、1801 年のドゼ将軍慰霊碑、1802 年の凱旋門とモニュメント政策を展開する。そして皇帝即位後の 1806 年にマドレーヌ教会とサン・ドニ教会の改修計画が明らかにされた。ルグランは前者のコンクールに参加するとともに、後者の担当建築家となる。当然、この仕事には、フランス建築史と建築全史に取り組んだルグランの新しい建築様式についての考えが投影されるはずであったが、これもルグランの早逝によって果たさずに終わる。

マドレーヌ教会改修計画についてはルグランに帰される「フランス帝国の凱旋年代記記念碑の記述」というテキストが残されている。この改修計画は「大陸軍の兵士たちに皇帝ナポレオンが捧げるモニュメント」であって「勝利の神殿」ではないとして、ルグランは古代の神殿や中世の教会の模倣を批判し、ファサードの表現においては凱旋門を支持している。そして内部に巨大な半円ドームを架け直径 30m の天球儀とする計画には、エティエンヌ＝ルイ・ブレの影響が顕著にみられる。またサン・ドニ教会をナポレオン廟へと改修する計画は、メロヴィング朝・カロリング朝・カペー朝の 3 王朝の霊廟と皇帝廟を並立する計画で、「ゴシックの柱」を設計の軸に据えたものだった。ルグランの「新しい様式」が具現化することはなかったが、リヴァイヴァリズム（復古主義）とは一線を画した表現となったであろうことは想像にかたくない。

(4) 建築史と次世代の育成：以上のような、建築知の拡大とあたらしいフランス建築という課題は、建築教育の問題と結びついていた。カサスの建築コレクションの解説書として書かれた『L.-F. カサスの指導の元模型が制作された様々な民俗の建築傑作コレクション』は、建築知の歴史化が目的であるが、一方で建築教育への提言もみられる。ひとつ

は建築芸術の地位向上である。イタリアに比してフランスにおける建築芸術の軽視を批判し、建築には様々な民族の信仰と文明を後世に伝える崇高な使命があるのだと説く。ふたつ目は建築教育の刷新の必要である。従来の書物による教育（ウィトルウィウス、ヴィニョーラ、パラディオ）だけでなく、実際の旅行に行くことの重要性と、すぐれた教育者（彼自身すぐれた旅行記の書き手）を養成する必要性を訴えている。

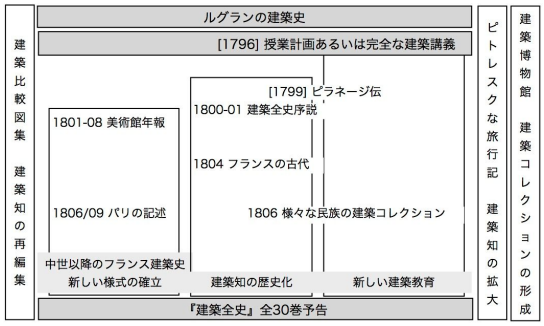

図 1 ルグランの建築史構想の見取図

ルグランの建築教育は、このカサスの建築コレクションの解説書以前にも「教育計画あるいは完全な建築講義」に示されていた。レオン・デュフルニ資料に含まれる、この草稿は、その経緯と内容から 1796 年に前後する時代に起草されたものと推定される。この短い草稿のなかでルグランは「完全な建築講義」のために 4 つの手段を示している。1．歴史教育、2．建築コレクション（建築模型、建築断片等の三次元資料）、3．旅行記と図集「2 次元資料」、4．比較一覧表（タブロー、tableau）である。図 1 に示したようにルグランの建築史構想は、建築コレクション＝建築博物館の形成、一連の『ピトレスクな旅』の出版事業、ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュランによる『新旧建築比較図集』の同時代的な成立を背景としていることがあきらかとなる。

ルグランはフランスにおけるピラネージ全集刊行のために執筆した「ピラネージ伝」（1799 頃）のなかで、次のように述べている。ピラネージが版画で描いた「古代の宝」は、「完全な建築講義を形成するだろう」。そして「いまこそ、絶え間ない努力によって、このような結束、こういってよければ建築の百科全書が実現するときなのである」。ルグランの建築全史は、同時代的な建築知の拡大と再編集の動きに支えられ、建築教育を完全なものとするために構想されていた。また、彼の構想は学士院の建築史教授であったレオン・デュフルニや、エコール・ポリテクニーク教授であったデュランなどにも共有されていた。そしてルグランの建築史への情熱が、新しいフランス建築の様式創造をその先に見据えていたことは、19 世紀建築を再評価する上で重要なことと考えられる。

＜参考文献＞

戸田穣「ジャック＝ギヨーム・ルグランの建築博物館と『完全な建築講義』」（日本建築学会『学術講演梗概集 2010（建築歴史・意匠）』、pp. 183-184）

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 3 件）

戸田穣「ジャック＝ギヨーム・ルグランの建築史構想」
日本建築学会大会、2013 年 9 月 1 日、北海道大学（北海道札幌市）
（日本建築学会『学術講演梗概集 2013（建築歴史・意匠）』、pp. 781-782、2013）

戸田穣「フランス第一共和政から第一帝政におけるモニュメントの変遷について　近現代教会建築史に関する比較論的研究（7）」
日本建築学会大会、2015 年 9 月 6 日、東海大学（神奈川県平塚市）
（日本建築学会『学術講演梗概集 2015（建築歴史・意匠）』、 pp. 167-168、2015）

戸田穣「ルグラン『L.-F. カサスの指導の元模型が制作された様々な民俗の建築傑作コレクション』について」
日本建築学会、2016 年 8 月 24 日、福岡大学（福岡県福岡市）
（日本建築学会『学術講演梗概集 2016（建築歴史・意匠）』、 pp. 739-740、2016）

６．研究組織

(1)研究代表者

戸田　穣（TODA Jo）
金沢工業大学・環境・建築学部・講師
研究者番号：00588345